

菊本副院長の漢方問答 その73

問 「肥満の漢方治療とはどのようなものですか？」③

答 肥満の漢方治療について、お話を続けます。今回から、表の「水太りタイプ」に入り、一番目の防已黄耆湯（ぼういおうぎとう）についてお話します。

表 肥満の頻用処方

固太りタイプ	防風通聖散、大柴胡湯、大承気湯
水太りタイプ	防已黄耆湯、越婢加朮湯、九味檳榔湯
瘀血を伴う場合	桃核承気湯、桂枝茯苓丸
気逆・気鬱を伴う場合	柴胡加龍骨牡蠣湯、桃核承気湯、加味逍遙散、抑肝散、半夏厚朴湯

（日本東洋医学会、「漢方医学テキスト」）

防已黄耆湯は、漢方の重要な古典である「金匱要略（きんきようりやく）」に登場します。構成生薬は、防已（ポウイ）、甘草（カンゾウ）、白朮（ビャクジュツ）、黄耆（オウギ）、生姜（ショウキョウ）、大棗（タイソウ）です。「傷寒論（しょうかんろん）」は、感染症の治療を中心に、漢方薬の使い方を解説した書物であることを、以前お話しました。「金匱要略」は、感染症以外の、慢性に経過する病気の治療法を解説した書物です。防已黄耆湯は、いわゆる「水の流れ」が悪くなって生じる病態に使用されます。

<引用>風水、脈浮、身重、汗出悪風者、防已黄耆湯主之。（金匱要略、水気病篇（すいきびょうへん））

水の流れが悪くなって、脈が浮き、からだが重だるく、汗が出て、寒気がするときには、防已黄耆湯が有効である。

脈が浮いているのは、からだの表面に病変があることを物語っています。要するに、からだの表面の水の流れが悪くなったため、からだの表面の水が滞って、むくみとなり、からだが重だるく感じ、からだの表面から汗が滲み出し、からだの表面が水浸しになっているのですから、寒気がするのです。防已黄耆湯は、防己と黄耆が中心となって、からだの表面に滞った水を処理します。

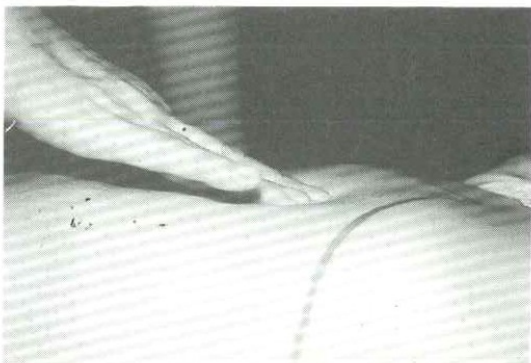


写真5 皮下組織の触診法

図の写真は、私の漢方の師匠である「小川新先生」が、からだの表面を診察されていた手です。実に丁寧に、慎重に診ていらっしゃいました。